子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2013年11月　NO.176

[もくじ]

2～3　映画の際（きわ）を求めて…奥村盛人
4～5　子どもが運営するまち「とさっ子タウン」…尾崎昭仁
6～7　高知出版学術賞その後①沖縄研究へ…吉成直樹
8～9　こうちネットホップの活動から見る高知の貧困問題…霜田博史
10～11　言葉の現場から42 ロンドン乞食のなぞ②…広井護
12～13　高知市文化振興事業団8月～9月の事業から
14～15　風俗歳時記・風伯

表紙デザイン：「林檎」門田春菜

公益財団法人高知市文化振興事業団

映画の際（きわ）を求めて

奥村　盛人

二〇一三年春、私は高知県内を走り回っていた。長編映画の公開準備のためだったが、お世話になった方々と毎晩、旧交を温めるのも楽しみの一つだった。

ある夜はかつての先輩記者数人と追手筋界隈を梯子酒。東京では気になる終電車も高知では気にする必要がない、というよりも気にする意味がない。二軒目だか三軒目だか、酔いも存分にまわったところで、私がなぜ新聞記者を辞して映画の世界へ飛び込んだのか、元先輩の女性記者から改めて問われていた。

「昔からやってみたかった」というのが偽りなき端的な表現だが、当時の気持ちを具体的に説明するのは簡単ではなかった。そのうち、先輩記者が私の心情を分析し始めた。

「結局、君は人間の際が見たいがよ。取材しゆう時もそうやったき。フィールドを変えて際が見とうなった。これからも敢えてしんどいところを選んでいくがやと思う」

そうかもしれない、と思った。

私は高知大学を卒業後、二〇〇一年に高知新聞社に就職し、支社局勤務以外は大半を事件記者として過ごした。もちろん柔らかい内容の記事を書くこともあったが、事件事故の取材や不正を追及する調査報道に最も時間と力を注いだ。先輩の言葉を借りれば「人間の際」にどこまで迫ることができるか、勝負する日々だった。

一方で、学生時代から映画の世界へ憧れも抱いていた。映画マニアではなかったが、中・高・大学と映画を観て心躍らせ、勇気を貰い、ひと時の没入が生きる糧だった。

記者としても人間としても充実した日々を送っていた二十代、頭の片隅で映画の世界を夢想する瞬間もあった。とはいえ記者生活や土佐人との触れ合いが魅力的かつ刺激的で、行動を起こすことはなかった。

気持ちに変化が現れたのは三十歳になってから。四十代までの十年間をどのように過ごしたらよいか、頻繁に考えるようになった。記者として走り続けるべきか、かつての夢を追い掛けるべきか。

映画に関しては昔から携わりたいとの思いはあったものの、作品づくりに取り組んだことは一度もなかった。端から見れば記者を続ける以外の選択肢はなかったのかもしれないが、三十一歳を目前にして、新たな分野へ挑戦する道を選んだ。

死ぬ瞬間に「やり残したことがある」と後悔したくないとの思いが決断の理由だった。映画のプロモーションでテレビ番組に出演した折には「暴挙に出た」と言われてしまったのだが（笑）。

多くの方が暴挙と感じた映画への挑戦は、思ったよりも早く成果が出始めている。幡多郡黒潮町を舞台に、カツオ一本釣り漁師の父と障害を抱える息子の葛藤や成長を描いた映画『月の下まで』。自ら脚本、監督し、資金集めから公開に至るまでほぼ全ての作業に携わった私の長編処女作は、複数の映画祭にノミネートされ、一定の評価を得た。二〇一三年六月以降は高知や東京などで一般公開となり、幸せなことに作品の規模を超えたヒットが続いている。

撮影リハ風景（大方高校）

撮影準備風景（土佐佐賀駅）

未経験で三十代から飛び込んだ世界。しかも記者を辞して数年で公開に至った映画。作品には有名な俳優が出演しているわけでもない。それでも多くの観客に作品を届けられているのは、舞台を高知県に据え、実際に高知でほとんどのロケをすることができたからだと思っている。

ロケをしたお宅で記念撮影（スタッフ、キャスト、地元の協力者とともに）

高知へ戻るといつも圧倒される海・山・川の力強さ。東京とは違った空気の色や光の濃さは、高知を離れた人間には殊に魅力的だ。目に見える部分だけではなく、人間の情の濃さや土地に染み付いたにおいのようなもの、全てひっくるめた高知の風景を幸運にも映像に焼き付けることができたのではないか。

もちろん、高知県の方々のご協力抜きに『月の下まで』を語ることはできない。

撮影時には黒潮町内の皆さんに宿泊から食事、小道具の準備までお世話をして頂いたし、高知県内様々な方に物心両面でご協力も頂いた。公開前の準備期間にも、東京で活躍する高知県出身者に人脈を繋いで頂いたこともあった。映画の撮影から公開に至るまで、そして上映が終わっても私を信じて応援してくださっている高知と高知に縁のある方々。本当に感謝の念は尽きることがない。

ポートレート

しかし、なぜ、土佐人は驚くほど情が深く濃いのだろう。「映画を撮る！」と一人叫んでいる常軌を逸した男に（笑）、今日まで何の見返りも求めずに手を差し伸べてくれている。「食うに困っちゅうろ」と米や野菜を送ってくれた事も一度や二度ではない。にもかかわらず、彼らは私から感謝の言葉を聞きたいとすら思っていないように感じる。

単に心優しいだけではなく、酒を飲んで喧嘩し、翌日何もなかったように一緒に昼飯を食べ、また夜は喧嘩、そんなこともままある。相手の地位や年齢で付き合い方を変えず、好きか嫌いか、面白いか面白くないか、そんな判断基準を間違いなく土佐人は持っている。およそ平均的日本人とは異なるその精神構造こそが、土佐人と高知県をたまらなく魅力的なものにしているのではないだろうか。

これからも土佐人と旨い酒を酌み交わし続けたい。欲を言えば、また高知を舞台に映画もつくりたい。そのためにも東京で、世界で、映画の際に迫れるよう闘いを続けるつもりだ。

おくむら　もりと

一九七八年　岡山市生まれ
高知大学を卒業後、二〇〇一年から高知新聞社で八年間、記者生活を送る。二〇〇九年に同社を退社し、上京。夜間の映画学校などで映像制作を一から学び、初監督映画の『月の下まで』が二〇一三年、高知県を皮切りに全国ロードショー。同年六月からは高知県観光特使。

子どもが運営するまち「とさっ子タウン」

尾崎　昭仁

全国各地で、「子どもが運営するまち」「子どものまち」「子どもがつくるまち」と呼ばれる取り組みが行われている。この「子どものまち」とは、就労や納税、消費活動、自治を唯一の市民である子どもだけが行うことができるまちのことである。

子どものまちの取り組みは、「職業体験」だけに留まるものではなく、子どもの社会参画や主体性の育み、コミュニケーションの場や居場所作りなどのネライがある。各地のこどものまちは、それぞれ主催者や主催団体が異なり、その「子どものまち」が持つ性質やネライ、手法は大きく異なる。また、地域の特性（文化や産業、習慣など）も各地それぞれであるため、まちや市民（子どもたち）が放つ雰囲気は、色々で面白い。

二〇〇九年、高知でも、子どものまちが開催された。その名も「とさっ子タウン」。

とさっ子タウンは、十～十五歳（小学校四年生～中学校三年生）の子ども約三百名を対象に、毎年一回開催している。今年から会場を高知市文化プラザかるぽーとに変更。主催は、とさっ子タウン実行委員会。様々な分野で市民活動を行っているメンバーをはじめ、県内の高校生や大学生、約百名で構成し、代表および副代表を学生が務めている。二日間のとさっ子タウン本番に向け、一年間かけて議論を重ねる。

子どもたちは、市民登録局で受付後、ガイダンスを受けようやくとさっ子タウン市民となり、まちの中で、様々なことをすることができる。各職場で仕事をして、銀行で給料（通貨は『トス』）を貰い、税務署で税金を納めたり、貯金をしたりすることができる。消費活動として、ゲームコーナーで遊んだり、飲食関係の店で買い物をしたりする。また、一定時間仕事を経験した子どもは、「新規起業」を行うことができる。子どもたちが「やりたいこと」「このまちに必要なこと」をカタチにすることができる。その他にも、市長・議員選挙や議会を開催し、まちのルールや課題などの議論を行い、まちを子どもたち自らが運営する。

とさっ子タウンでは、次の三つをネライとしている。

①社会の仕組みを知り、興味を持ってもらいたい

②異年齢間のコミュニケーションの場にしてほしい

③高知の仕事や文化、遊びを楽しく体験してほしい

この三つを通し、最終的に、社会の仕組みを知り、現実の社会に興味を持ってもらうことや、自分でまちを変えることができる、社会を変えることができるということを感じたり、気づいたりしてもらえればという想いで取り組んでいる。

とさっ子タウンの特徴としては、ネライの一つに「高知の仕事や文化、遊びを楽しく体験してほしい」がある。高知には、お酒やお座敷遊び、マンガ、路面電車など「高知らしい」文化が多くある。そういったモノやコトを楽しく体験し、知ってもらいたいという想いがある。実際、とさっ子タウン内では、お座敷遊びの箸挙やノンアルコールのバー、マンガ家の仕事、路面電車がまちを走るなど、「高知らしさ」が多く見られる。こういった文化の継承や体験にあたっては、プロのマンガ家や地元企業、高知の料亭などにご協力いただいて実現することができている。

集合写真風景

はし拳道場を楽しむ子ども

また、その他のとさっ子タウンにある四十種類以上の職業は、専門家にご協力いただいているおかげで、子どもたちが、本物の仕事を体験することができている。本物の仕事を専門家に教わることで、子どもたちの意識は格段に上がると感じている。

救急搬送の場面

とさっ子タウン内で、ケガ人が出たということで、消防局の救急隊による担架を使った救急搬送が行われていた時の一コマ（もちろん本当のケガはしていない）。なんと狭い道で、路面電車と救急搬送が鉢合わせしてしまった。現実社会では、救急車両優先の場面である。とさっ子電鉄で働く子どもたちは、とっさに車体を壁ギリギリまで寄せ、救急搬送を優先的に通すという判断をした。さらに、車掌さんが乗客に対し、電車の遅れを謝っているということに驚いた。子どもたちは、「遊び」をしているのではなく、「仕事」をしている意識を持っていた。

救急車両と路面電車の場面

このように、子どもたちの発想やチカラに驚かされる場面がとさっ子タウンの中には、たくさんある。関わっている実行委員をはじめ、スタッフ、専門家の皆さん、そして、保護者の皆さんからも子どもたちのチカラに驚かされたという声を頂いている。

とさっ子タウンで二日間過ごした子どもたちが、家庭に帰り、両親に対し「税金払いゆう?」「選挙行った?」など、質問する事があるようだ。まさか、子どもたちから聞かれるとは思っていない両親は、ギョッとするだろう。子どもたちは、着実に「社会」に関心を持ち始めている。そして、社会を変えることができるチカラも秘めている。

とさっ子タウン実行委員会は、「子どもたちのチカラを信じよう」を合言葉に一歩後ろに立ち、子どもたちの相談に乗るくらいの気持ちで取り組んでいる。これから先の社会を担う子どもたちの成長する姿を楽しみながら。

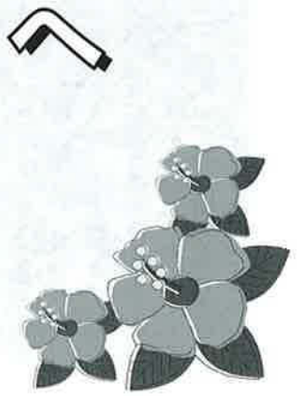
おざき　あきひと

一九九一年　高知市生まれ
高知短期大学卒業後、ＮＰＯ高知市民会議職員となる。学生時代から、とさっ子タウンを含め様々なＮＰＯ活動を経験。現在、とさっ子タウンの事務局を担当する。
http://tosacco-town.com/

高知出版学術賞その後①

沖縄研究

吉成　直樹



高知出版学術賞を頂いたのは一九九七年三月のことでした。一九八二年から勤務していた高知大学を辞めたのは翌年の四月ですから、賞を頂いた恩返しもせずに、現在の大学に移ったことになります。それどころか、それ以来、勤務先の性格上（法政大学沖縄文化研究所）、高知を題材に何か仕事をしたこともありません。もっぱら「沖縄」を研究の対象にしてきました。

沖縄の研究をはじめたのは学生時代に遡ります。小さな島に観光に行った時にたまたま目にした祭りがきっかけです。神と人間の交流を宗教劇として女たちが演じている。女たちは全身白い装束でした。見てはいけないものを見たという気がしました。この時の違和感はいまだに強い感覚として残っています。たぶん、この感覚は、沖縄の文化を理解することはできないということの刻印です。

はじめは沖縄の文化を研究していたのですが、やがて歴史に移っていくことになったのは、この「文化がわからない」ということと関係があります。いま考えているのは沖縄で農耕が始まり、鉄器の使用が浸透していく十二世紀から、日本とはまったく別個に琉球国を形成する十五世紀はじめまでの社会変化の要因です。琉球国は明治政府によって日本に組み込まれる一八七九年まで存続します。それにしても穀作農耕（稲、麦など）が始まるのが十二世紀というのは、北九州で稲作が始まったときより千年以上も遅かったということになり、なぜこれほど遅れたのか不思議な気がします。それまでは採集狩猟民社会だったのです。

世界的にみて、沖縄のように島という狭い空間で、採集狩猟民社会が農耕社会へと自立的に発展することはほとんどありません。ですから、その変化の要因として植民を考えるのが普通です。実際、九州から奄美諸島を経て沖縄諸島へという社会変化（人の移住）が波及していく様子がわかってきました。琉球国が形成される時にも人の移住があったらしいこともわかってきました。しかし、沖縄の人びとは、こうした事実を受け入れるにはかなり抵抗があるようです。

それは、「日本」に対して心情的な反発があるからです。太平洋戦争末期の地上戦とそれにともなう大きな犠牲、一九七二年の「日本」復帰後も解決されない基地問題など、数え上げればきりがありません。こうした経験を通して、沖縄の人びとは復帰した「日本」とは何か、「沖縄人」とは何かを問い続けます。その結果、沖縄の人びとは独立国として存在していた琉球国にみずからのアイデンティティを見出すことになりました。その傾向は一九八〇年頃から強くなります。ですから、琉球国の成立も、それにいたる過程も、自力で発展したとする説明以外は受け入れることが心情的に難しいのです。

琉球王朝の王城「首里城」

かつて「カツウラ」と呼ばれた桂浜

正しいかどうかはともかく、研究の成果についてオープンに議論するにはどうしたらよいのか。とりあえずは、沖縄の基地問題を解決することです。それ以外、同じテーブルにつくことができそうにありません。

高知出版学術賞を頂いたのは、高知に伝わる俗信の断片から信仰のあり方を復元する仕事に対してでした。もう関心もかわり俗信を対象にすることはないかもしれませんが、大学の拘束から離れたら、沖縄をはじめとする黒潮の洗う地域の文化の根にあるものを復元したいと思っています。そういうものが本当にあるのかということから始めなければなりませんが、その手がかりとして漠然と考えているのが地名の類似です。奄美大島（鹿児島県大島郡瀬戸内町）には「カツウラ」という地名があり、太平洋に注ぐ勝浦川流域にある「カツウラ（町）」（徳島県）、「（ナチ）カツウラ（町）」（和歌山県）、「カツウラ（市）」（千葉県）があります。すべて黒潮の洗う地域です。では高知県にあるのかと問われれば、実はあるらしいのです。桂浜です。高知大学に勤務していた時に地理学の先生に教わったのですが、桂浜の「カツラ」は「カツウラ」に由来するとのことでした。この問いが解決されていないことを願いながら、もう少しだけ沖縄の研究を続けるつもりです。

第七回高知出版学術賞を受賞した著書『俗信のコスモロジー』

よしなり　なおき

一九五五年　秋田県生まれ
一九八〇年東京大学理学部地理学課程卒業、一九八二年東京大学大学院理学系研究科博士課程中退後、高知大学人文学部に勤務。講師、助教授、教授を経て、現在は法政大学沖縄文化研究所教授。専門は地理学、民族学・民俗学。南四国の俗信を調査、研究した著書『俗信のコスモロジー』（白水社）にて第七回高知出版学術賞を受賞。その他の著書（共著含む）に『琉球の成立－移住と交易の歴史』（南方新社）、『琉球からみた世界史』（山川出版社）、『古代末期・日本の境界－城久遺跡群と石江遺跡群』（森話社）など。

こうちネットホップの活動から見る
高知の貧困問題

霜田　博史

二〇〇八年末に、東京で「年越し派遣村」が開催されたあたりから、貧困問題が多くの人の関心を呼ぶようになってきました。働いても十分な所得を得ることができないワーキングプア、生活保護を受給できないことで起きた餓死事件、貧困家庭における子どもの支援など、社会的支援を要する人たちへの対応の必要性は広がりをみせるようになってきています。

こうした状況を受け、高知においても生活困難に直面している人たちの実態やニーズがまだ十分に把握されていないうえ、生活保護や医療、住居、食料などの生活保障が受けられず、困窮しながらも行政施策の谷間におかれ、地域からも孤立化している人たちがいる、という問題意識から、二〇一〇年九月、市民や学生、大学教員など有志で、「ホームレス支援と貧困問題を考えるこうちの会」（通称「こうちネットホップ」）を立ち上げました。

こうちネットホップは、県内におけるホームレス等の貧困問題の実態を調査研究するとともに、四国や全国の支援活動の現状把握や支援団体との交流、生活と自立を支援する諸制度の学習を行い、さらに、ホームレス等の生活困難に直面している人たちの相談支援や生活支援活動を行うことを目的としています。会の通称「こうちネットホップ」には、ホームレスや貧困の実態を調査研究し、支援活動を進めてゆくための「ネットワークづくり」という意味と、行政施策のセーフティネットと民間のネットワークを基盤にして、生活の自立にむけたホップ・ステップ・ジャンプにつなげる「ホップ」という二重の意味が込められています。

現在の主な活動は、月一回行っている路上生活者を対象とした夜回り訪問活動です。二〇一二年の一年間で、路上生活から居宅生活に移行を望む人たちの援助を行い、五人の相談を受けました。夜回り活動を継続していく中で、「常連」のホームレスの人とも顔なじみになり、「最近〇〇公園でホームレスを見た」「寝袋を自転車に乗せている人がいた」などの情報を寄せてくれたり、他の「常連」さんの顔が見えないときは近況を教えてくれるなどの関係が徐々に生まれてきています。

夜回り活動のようす

ここで、夜回りの際の相談事例をひとつご紹介します。高知市内で、夜回りでよくお会いするMさん（五十歳代男性）です。とある日の夜回り中に、看護師のメンバーが健康相談の一環で血圧を測定すると、上の血圧は一八〇を超え、下の血圧に至っては一二〇を超えていました。「これはいけない」と受診を勧めましたが、本人は特に気にしていない様子。「無料低額診療で受診すればとりあえず費用は心配ないので」と説得し、高知市内で無料低額診療事業を行っている潮江診療所で受診することになりました。

橋の下で生活するホームレスの「家財」

潮江診療所でMさんは十年ぶりくらいに一通りの検査を行い、降圧剤の薬も処方されました。とりあえずの処方で、この薬でいいかどうかも含めて診ていかないといけないので、定期的な受診を勧められました。しかし、そのためには生活保護受給も含めて何らかの健康保険が必要です。現状ではまずは生活保護だろうということで申請を勧められたものの、ご本人は拒否。一番の理由は「家族に迷惑がかかる」から。何とか月六～七万円の収入があって、夜はマンガ喫茶などで過ごしているというMさん。自動車会社から始まって、派遣会社の仕事や警備の仕事など、様々な経験を経て今の状況になっているMさんは、「とりあえずは生きている」「嫌な思いを自分もしたくないし、家族にもさせたくない」「僕のような人間はどうなっても仕方がない」というような思いからか、今のところ生活保護を申請するつもりはないとのこと。

Mさんの事例のように、路上生活を余儀なくされている方の多くは、他人に迷惑をかけたくない、自分が悪い、という思いを持たれています。健康で文化的な生活を送ることは憲法で保障された国民の権利、ということからすれば、いわゆる「自己責任」という世間からの圧力を一緒に跳ね返したいところですが、なかなか「しんどい」という現状です。

厚生労働省が発表している最新の「ホームレスの実態に関する全国調査（概数調査）結果」（平成二十五年四月二十六日付）によると、高知県内のホームレス生活者は四人ということで、全て高知市内で確認されています。平成二十一年調査では十四人ということなので、かなり減ってきたということのようです。厚生労働省の発表したとおりの状況であればよいのですが、私たちが夜回り活動を行う中で聞くだけでも、「ほかにも何人かいる」とのこと。全国調査は実態を正確に反映したものとはなかなか信じられません。これは調査の方法として市町村の目視巡回調査がとられているため、たまたま目にしなければカウントされないという事情があるかと思います。

貧困問題を考える講演会のようす

高知で路上生活をされている方は、よく移動をしながら生活をされているようで、なかなか私たちの活動と繋がっていくことが難しいところもあります。例えば松山市では、一定の場所に集住している現状があり、良くも悪くも存在が「見えやすい」ということがあります。もちろん私たちの活動量が不十分であるということもあるのですが、存在が「見えにくい」というのが、高知のホームレス問題の特徴といえそうです。

二〇一二年度から高知市まちづくりファンドの助成を受けたこともあり、こうちネットホップでは、ホームレス問題にとどまらず、広く貧困問題に関する講演会や学習会も行っています。講演会や活動の情報については、ブログ等を通じて発信を続けていく予定です。

立ち上げから四年、今後活動の幅を大きく広げていきたいところなのですが、今は、まずはゆっくりと、活動を継続させ、多くの方に関心を持ってもらえるようになることを目指しています。

しもだ　ひろふみ
一九七七年　群馬県生まれ
高知大学人文学部准教授、こうちネットホップ事務局長。

言葉の現場から 42

ロンドン乞食のなぞ②

広井　護

前回に続き、芥川龍之介の短編「父」を読み解いてゆきたい。

友人達の面前で父親を「あいつはロンドン乞食さ。」と言い放った能勢五十雄の話である。日光への修学旅行に出発する日の朝、上野駅の停車場で起こったささいな出来事を芥川は万感をこめて描きだす。思春期というものの、抜きがたい哀しさをとらえた作品である。

前時の復習から始めたい。

停車場に出入する大人達を標的にして悪口を言い合う中学生の群れがリアルに描かれている。その熱病のようなばか騒ぎのリーダーが能勢五十雄だった。（「五十雄」という名前にも注目していただきたい。）そのうち能勢一人で悪口を言う役をひきうけることになる。

そのとき、グループの一人が、時間表の前に立っている妙な男を発見する。能勢五十雄の父親だった。

その男は昔風の黒い中折れ（帽子）の下から、半白の毛がはみ出しているところを見ると、もうかなりな年輩らしい。……服装といい、態度といい、すべてが、パンチ（＊滑稽漫画）の挿絵を切り抜いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思われない。――自分たちの一人は、また新しく悪口の材料が出来たのをよろこぶように、肩でおかしそうに笑いながら、能勢の手をひっぱって、「おい、あいつはどうだい。」とこう云った。

語り手である「自分」は、グループの中で能勢の父をただ一人見知っていた。「自分」は思わず「あれは、能瀬のファアザアだぜ。」と云おうとした。

するとその時、

「あいつかい。あいつはロンドン乞食さ。」（＊ロンドン乞食は気位が高く、紳士のようにふるまうと言われていた。）

こう云う能勢の声がした。皆が一時にふき出したのは、云うまでもない。中にはわざわざ反り身になって、懐中時計を出しながら、能勢の父親の姿を真似て見る者さえある。自分は、思わず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇気が、自分には欠けていたからである。

能勢は、それが父親であることを、知られたくなかったのである。

能勢五十雄の人生は短かった。中学を卒業すると間もなく、肺結核にかかって物故する。その弔辞を読んだのが、「自分」である。能勢の人生のピークは、もしかすると上野駅の停車場で同級生たちのヒーローになっていたあのときだったかもしれない。

前号では、反抗期の少年の心理に焦点をあてた授業を紹介した。今回は、「黙して立つ父親の姿」を読み解きたい。

この作品のタイトルは「父」であり、父のあり方をぬきにして、作品の深層をとらえることはできない。ところがこれが、難物なのである。父は黙して語らず、ただポンプのように立ち尽くしているだけなのだ。

大学の薬局に勤めていた能勢の父親は、出勤の途中、修学旅行に出かける息子をこっそり見送ろうと停車場に来ていた。時間表を見るふりをしながら、実は息子のようすをうかがっていたのである。

息子の残酷な言葉が、父親に聞こえたかどうかは書かれていない。だが、黙って時間表の前に立っている父の姿は、執拗なほど詳しく描かれている。この濃密な描写の中に語り手の――そして作者・芥川の思いが――深く塗りこめられている。

曇天の停車場は、日の暮のようにうす暗い。自分は、そのうす暗い中で、そっとそのロンドン乞食の方をすかして見た。

すると、いつの間にか、うす日がさし始めたと見えて、幅の狭い光の帯が高い天井の明り取りから、茫と斜めにさしている。能勢の父親は、丁度その光の帯の中にいた。

――周囲では、すべての物が動いている。眼のとどく所でも、とどかない所でも動いている。そうしてまたその運動が、声とも音ともつかないものになって、この大きな建物の中を霧のように蔽っている。

しかし能勢の父親だけは動かない。この現代と縁のない洋服を着た、この現代と縁のない老人は、めまぐるしく動く人間の洪水の中に、これもやはり現代を超越した、黒の中折をあみだにかぶって、紫の打紐のついた懐中時計を右の掌の上にのせながら、依然としてポンプの如く時間表の前に佇立しているのである……。＊（含みのある表現である。ぜひ読み返していただきたい。）

整理すれば、ここには三つのものが描出されている。

①曇天にさしてきたうす日

②周囲の動くもの

③動かない父親の姿

「光」→「動」→「不動」の順で描かれるこの三者は、響き合いながら、父親の姿を強烈にライトアップしている。早朝の「うす日」の中で「まわりの動くもの」と「不動の父」が対比されている図式である。

ところがこの構図では言い尽くせない何かが、情景のなかを重くただよっている。名状し難い何かである。その正体が長い間つかめなかった。

ある時、次のような生徒の感想に出会った。

> うす日を浴びている父の姿はたしかに哀しいけれど、後光がさしているような気もする。

あっと目の覚める解釈だった。そのとき気がついた。「黙して立つ父の姿」は、二重のイメージとして描かれているのだ。たとえば曇天の停車場にさす「うす日」は、否定的にも読めるが肯定的にも読める。否定的に読むと。

①人生のわびしさや切なさそのもののような寂しい光

②父親の滑稽な服装、姿を露骨に照らし出す残酷な光

肯定的に読めば。

①西洋の宗教画にあるように、天からかすかにさしてくる聖なる光

②「光の帯のなか」にいる父親の姿は、後光がさしているようにも見える。

この二重のイメージの中に父親は立っている。父の姿を見つめる「自分」のまなざしが二重化しているのである。上野駅の停車場に立って出来事を生々しく目撃している少年のまなざしと、長い時をへだてて、この情景を回想している大人になった「自分」のまなざし。この二つのまなざしの重なりの中に父の姿は浮かび上がっている。

映画の中で、ときに無声の回想シーンが挿入されることがある。そういうシーンと似た静けさがこの場面をひたしている。これは、大人になった「自分」のまなざしに映し出された回想の情景である。大人である「自分」の目に父の姿は、ある種神々しく映っているのである。

「黙して立つ父の姿」を読み解く鍵は、この「二重視点」にある。

以下の表現にも「二重のまなざし」が反映している。「この現代と縁のない洋服を着た」「この現代と縁のない老人」「これもやはり現代を超越した黒の中折れをあみだにかぶって…」――これらの言葉は、否定的には「古臭い、時代遅れの、ダサい父親の姿」を表していると読めるが、肯定的に読むこともできる。

まわりのものみなが動いているなかで父親だけが不動なのは、父の姿が時間を超越しているからだ。息子から罵倒されながらも、後ろ姿で息子を見つめて黙って立っている父親の姿は、「永遠に父なるもの」、「永遠に親なるもの」の姿として、大人になった「自分」の目に蘇っている。それは、「無償の愛」の具現化された姿なのだ。

父は「時間表」の前に立ち「懐中時計」を見ている。これは、象徴的な表現だ。「時間」（時間表・時計）と「永遠」（父の姿）が鋭く対置されている。時計を見ている父は、「自分」の思い出の中で、時間を超えて生きている。

このように重層的に読むことで、**「ポンプの如く時間表の前に佇立しているのである……。」**という奇抜な比喩の意味も見えてくる。

父の姿は、ポンプのように、無粋に滑稽に、だが、固く不動に、「自分」の思い出の中で、永遠に生き続けているのである。…

ちくま文庫・芥川龍之介全集Ⅰの脚注によると、「能勢五十雄は、芥川と小学校および中学校同窓の実在した人物。」と記されている。小説「父」と似た出来事は実際にあったのかもしれない。

私は、「五十雄」という名前から、ある仮説を立てている。父親が息子を停車場まで見送りに来るというのは、封建制の名残が濃厚だった当時（明治時代の末）にはめずらしい光景だっただろう。

能勢五十雄は、父親が五十歳のときに生まれた子供だったのではないか。それゆえに父にとっては掌中の玉のような存在だった。…そういう気がしてならないのである。

ひろい　まもる
一九五四年　高知市生まれ
早稲田大学第一文学部日本文学科卒業後、私立土佐中高等学校に勤務。国語の教師。

8月～9月の事業から

こどものためのアートと音楽「3本の手のスケルツォ」

八月十四日（水）、高知市文化プラザかるぽーと小ホールにて、劇団 Teatro all'improvviso（テアトロ・インプロヴィーゾ）を主宰するダリオ・モレッティさんによるペインティングパフォーマンスと、並河咲耶さんによるピアノ演奏の舞台「こどものためのアートと音楽『三本の手のスケルツォ』」を開催しました。

一つの絵から様々なストーリーが展開していく、ダリオ・モレッティさんの様々なギミックを凝らしたコミカルでユニーク、そしてちょっぴりホラーなパフォーマンスと、それを引き立たせる並河咲耶さんのピアノ演奏の相乗効果で、超満員のお客様が詰めかけた会場は大きな歓声で包まれました。まるでビックリ箱の様な演出に、中には悲鳴をあげているお子さんも居ました。

本番の前日には、ダリオさんによるペインティングワークショップを開催しました。ダリオさんのユニークな動きと絵でこども達が自然に笑顔を浮かべる様子を見ていると、芸術に言葉の壁なんて関係無いという事を強く感じました。ワークショップの参加者みんなで作り上げた絵は、公演当日の会場ロビーに展示しました。

〈入場者数・二百名〉

ワークショップの様子

Jazzchor Freiburg Japan Tour 2013

八月三十一日（土）高知市文化プラザかるぽーと大ホールで、二〇一〇年以来三年ぶり四度目となるジャズコァフライブルクの公演を開催しました。

ジャズコァフライブルクは、ドイツのフライブルク市を拠点に世界中で活動を続ける市民コーラスグループで、二〇〇二年のかるぽーと開館年から定期的な高知公演を行っています。

今回の編成は、初となるオールアカペラです。これまではピアノトリオの演奏に乗って歌声を届けていましたが、グループの指揮者・ベアトランドさんの変幻自在のアレンジと、グループメンバーのユリアンさんのボイスパーカッションにより、ドラムやベース音など、全ての音を声のみで表現し、楽器とは違った深みのある演奏となりました。

また今回の日本ツアーでは、グループの意向により、東日本大震災の被災地である、宮城県と福島県の三会場でチャリティー公演を行いました。

このチャリティー公演の取りまとめや制作業務も高知の実行委員会が行い、ジャズコァフライブルクの音楽を通じて、高知と東北の絆を深めることにもなりました。

〈入場者数・五百七十名〉

高知市文化振興事業団

第十一回詩のボクシング高知大会

二人の朗読者（朗読ボクサー）が自作の詩を交互に朗読し、ジャッジが判定を下していく「詩のボクシング」。その第十一回高知大会が九月十四日（土）に高知市文化プラザかるぽーと小ホールで開催されました。

当館の開館事業の一つとして二〇〇二年から十一年に亘って行われてきたこの大会は、詩のボクシングのさらなる発展を模索するため、今回をもって一旦終了することとなりました。

これまで数々の熱戦を繰り広げ、切磋琢磨してきた高知の朗読ボクサー達の集大成となった今大会。ベテラン勢の参加が多い中、決勝戦には何と初参加の高校生・ひめか選手が見事勝ち上がり、通算四度の優勝を誇る高瀬草ノ介選手と対戦。初の大舞台にも怯まず、堂々且つ凛とした朗読の姿は素晴らしく、これからを担う若い力の台頭をひしひしと感じました。

軍配は僅差で高瀬選手に。第一回大会から参加し、運営にも尽力してきたその熱意が、高知大会を締めくくるに相応しい結果となって実を結びました。高瀬選手は、十月十九日に横浜市で行われる全国大会に出場することになっています。

〈入場者数・八十二名〉

高知街ラ・ラ・ラ音楽祭2013

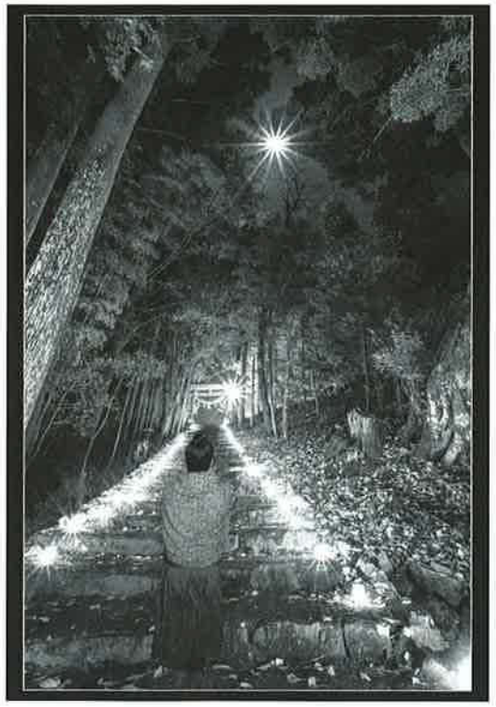
九月十五日（日）高知市中央公園などにおいて、十二回目となる高知街ラ・ラ・ラ音楽祭を開催しました。

この催しは、高知市中心部に複数の野外ステージを設け、公募により参加したミュージシャンによる演奏をお届けする県下最大級の音楽祭です。今年は全十会場に、県内外から約百三十組・五百名が集い、プロ・アマ、ジャンルを問わない様々な音楽が街に響きました。

当日はあいにくの悪天候にも関わらず、多くの方にご来場いただき、しっとりとした演奏を楽しんだり、手拍子で会場を盛り上げたりと、それぞれが自由に音楽を楽しまれていたのが印象的でした。また、ゲストとしてお迎えした「王様」と「ブラック・ボトム・ブラス・バンド」の演奏では、ステージのすぐ前まで観客が殺到する程の盛り上がりとなりました。

この音楽祭は、市民有志による実行委員会が運営しています。今年は実行委員のアイデアで、まちを元気にしようと活動する様々な団体と連携し、活動紹介やスタンプラリーなども実施しました。「音楽の力でまちを元気に！」を合い言葉に活動を続けるこの音楽祭、今後も多くの方々と繋がり、育てていきたいと思います。

〈来場者・約五千人〉



高知を撮る

第29回写真コンテスト入賞作品

天空への帰り参道

（平成24年11月24日　四万十町下津井）

北村　健三

下津井の住吉神社参拝後、帰るとき、天に向かっているような気分になります。

甘渋考

風俗歳時記

同じものを春は「牡丹餅」、秋は「おはぎ」というのは、その季節の花であるボタンの花のように餡をまぶしたことから「ぼたんもち」、つづまって「ぼたもち」、「おはぎ」は萩の花の咲き乱れるさまに似ていることから、そう呼ばれるようになったという。風流好みの命名といえそうだが、ほかにも「隣知らず」「北窓」の呼び名もある。ともに餅のように搗く必要がなく、隣も作ったことを知らないことから、北窓は搗き、つまり月が入らないことからきたものである。

私ごとを書かせてもらうと、若いころは洋菓子党だったが、このころは和菓子党になっている。味の好みも歳とともに変わるものだ。おはぎにも、甘さに注文をつけたくなっている。

甘味の中では、なんと言っても柿が最高である。柿は日本が誇る甘味の一つで、和三盆もこれにはかなわない。後味に全く嫌味が残らない。

その柿をこのころの子供たちは、あまり欲しがらない。柿など欲しがらなくても、甘味はどこにでもあるのだ。庭の次郎柿も、小学生が前を通るとき「あげるよ」と声をかけても「いらない」という。喜んで貰ってくれるのは幼児である。この場合は、連れの親までが一緒に喜んでいる。近所に届けたときの反応も、大人の方がいい。

さて、いまは「甘柿」の時代で、すぐ食べられるものが求められるが、「渋柿」も見直してみる必要がありはしないか。甘柿は早く樹からもぎ取られるが、渋柿は長く樹上に残る。それに熟すると実が美しい。やがて自然に渋が抜け、甘味が増して小鳥の餌になる。雀や目白、ひよ鳥など、甘党の鳥が柿のある間飛んでくる。もうそのころは、甘柿はどこにもない。

小鳥たちのために柿をとまではいわないが、こうした風情が生活のなかに折り込まれているのも、いいではないか。

（恭）

白A高知公演

2011年、世界最大の演劇祭「エディンバラ フェスティバル フリンジ」で「Spirit of the Fringe」を受賞した白A。緻密な計算によって生み出されるパフォーマンスは、映像と音楽、テクノロジーと人間の完璧な融合を実現。クリアでポップなテクノサウンドと誰もが楽しめるパフォーマンスはアジアやヨーロッパを中心に世界中で評価されている。そんな白Aの西日本初公演。

【日　時】12月14日(土) 午後1時30分開場、午後2時開演、午後3時終演予定
【会　場】高知市文化プラザかるぽーと大ホール
【入場料】前売：一般3000円　高校生以下2000円
当日：一般3500円　高校生以下2500円
※全席自由、未就学児入場無料（座席占有不可）。
【お問い合わせ】
高知市文化振興事業団　TEL:088-883-5071

高知市立中央公民館
2013市民学校年末特別教室

「お正月の着付け」

気軽に参加できる全２回の着付け教室です。
初めての方大歓迎。初歩から丁寧に指導していただきます。
習ったことはあるけどちょっと不安で復習したい…そんな方もぜひご参加を。

日時：12月6日(金)・13日(金)全２回
13:30～15:30

会場：高知市文化プラザかるぽーと
９階 和室

講師：谷沿正子
（服部和子きもの学院 高知分校長・教授）

定員：先着30名

受講料：900円

ご用意いただくもの
着物、帯（半巾・名古屋・袋）、長じゅばん、裾よけ、肌じゅばん、足袋、帯枕、帯あげ、帯じめ、前板、伊達じめ２本、腰ひも４本、タオル３枚、手ぬぐい１枚

11月10日(日)電話受付開始

■お申し込み・お問い合わせ
高知市文化振興事業団　088-883-5071

今号の表紙

「林檎」

門田　春菜

今の季節の旬の中で、一番身近なものが、りんごでした。文化高知も身近な存在になってもらいたいと思い、りんごを写真に撮り表紙にしました。

（かどた　はるな／
国際デザイン・ビューティカレッジ１年生）

風伯

結婚できるようになった男

数年前この欄に、「結婚できない男」について書かせてもらったことがある。結婚したいのに結婚できないという悲哀をメンメンと綴った。ところが、それを読んだ友人から、「結婚したいと口先では言っているが、ほんとうにそうだろうか。もっと切に願望しないから見つからないのだ」と説教された。

そこで、「切に願った」というわけではないのだが、こんなわたしのような男でも、結婚できることになった。ちょっと急な話である。一緒になってやろうか、といってくれる殊勝な女性が現れた。還暦をとっくに過ぎた男が、いい歳をしてなにを今更と思われるかも知れないが、歳をとるにつれ、独り身の侘しさはことのほか身に染みるものである。

ひとりでいるのがさびしいというわけではない。たとえばひとり家で本を読んでいると、時はすぐに過ぎる。ところがである。「これは一種の閉じこもり」かも知れないと、誰かと出かけたり、行動を共にできる機会を持てたりすると、ひとりの侘しさを感じてしまうようになる。歳がいくとなおさらこれが身に沁みる。ふたりで一緒になって何かをしようというのも悪くはないな、と思ってしまったような気がする。

離婚してすぐ結婚相手を見つけてあっという間に結婚してしまう周りの男どもを横目に、雌伏二十数年、やっとである。

とはいえ、みんなに「結婚します」といったものの実際に籍を入れるのはまだ先であるし、これからどういうことが起こるか、知れたものではない。

結局、結婚できませんでした。では笑えない話になってしまうのだが……。

（霖）

文化高知 No.176 2013年(平成25年)11月1日発行 【隔月発行】
公益財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5071/郵便振替01680-5-14869

絵のあるところ

上村菜々子展

第8回 Concours des Tableaux 企画展

2013年12月10日(火)～15日(日)
高知市文化プラザ かるぽーと 7階・第5展示室
10:00～19:00(最終日17:00まで)
入場無料

主　　催／公益財団法人高知市文化振興事業団
お問合わせ／〒780-8529 高知市九反田2-1　TEL:088-883-5071　FAX:088-883-5069
後　　援／NHK高知放送局、RKC高知放送、KUTVテレビ高知、KSSさんさんテレビ、高知ケーブルテレビ、エフエム高知、高知新聞社、朝日新聞高知総局、読売新聞高知支局、毎日新聞高知支局

第9回美術作品コンクール
CONCOURS des Tableaux

高知市文化振興事業団では、若手の美術作家を支援するために、美術作品コンクールを開催します。
これは芸術文化を創造する人材を積極的に支援・育成することを目的とする事業です。
フレッシュな感性、情熱あふれる作品をお待ちしています。

●審査員
窪田研二氏(キュレーター/筑波大学芸術系准教授)

●対象
平面作品(壁にかけられるもの)。書、写真は対象外。

●資格
県内在住あるいは県出身者で18歳以上35歳未満の個人(平成26年4月1日現在)。

●規格
260cm×260cm(枠・額を含む)以内の作品2点まで出品可(未発表作品に限る)。枠装、額装あるいは容易にワイヤー・フック等で壁面展示可能なもの(ガラス・アクリルの使用不可)。出品料無料。
※1）展示作品の天災、不可抗力、いたずら等による損害について主催者は責任を負えません。
※2）作品に水、生花等生ものの使用を禁止します。
※3）枠装、額装などに不備のある作品は、受付できない場合があります。
※4）展示後の作品は、加筆、撤去、配置替え等を行わないことを原則にします。

●日程
作品搬入：1月18日(土)・19日(日)9:00～17:00
一般鑑賞：1月21日(火)～26日(日)
　　高知市文化プラザかるぽーと　第1・第2展示室
公開審査：1月26日(日)14:00～16:00(表彰式16:00～)

●賞
最優秀作1点賞金30万円、優秀作2点賞金各5万円を贈呈。
また、最優秀賞受賞アーティストは、受賞後概ね1年以内に市民ギャラリーにて、高知市文化振興事業団主催の企画展を開催することができるものとします。
※ただし、同一作家の最優秀受賞は3回までとする(優秀作はその限りではない)。3回目の最優秀授章時の副賞は作家と相談の上決定する。

●応募方法
所定の申し込み用紙(高知市文化プラザをはじめ、県内文化施設にて配布中。またホームページからのダウンロード可)に必要事項を記入の上、作品の写真(出品予定作品は1点、制作中のものでも可。過去に制作した作品は2～3点。裏面に天地を表記)を添付し、1月5日(日)17:00までにお申し込みください(郵送・持参いずれも可)。これ以後も搬入日まで受付を行いますが、その場合には展示場所・目録掲載等に十分配慮できない場合があります。

●お申し込み・お問い合わせ先
〒780-8529　高知市九反田2－1
高知市文化振興事業団「美術作品コンクール」係
TEL 088-883-5071

●主催：公益財団法人高知市文化振興事業団